

# 生きていることの不思議

東京大学 2012 年夏学期 宗教学レポート  
安政真弓

序論

本論

1. 神秘体験その一
2. 神秘体験その二
3. オウム真理教について
4. 世界の果てについての考察

結論

序論

この度 30 年振りに東京大学を受験したところ、幸せなことに合格することが出来た。東大に入学するにあたって、私には二大目標がある。一つは、ギリシャ語とラテン語をマスターすること。他の一つが、人は宗教なしでも幸せになれるか、ということを追究することである。前者については早速初級の授業に登録し、自分なりに最大限の努力を続けてきた。今後も継続して真剣に取り組むつもりである。後者については取り敢えず鶴岡先生の宗教学の授業に出てみることにした。授業は、回を追うごとに興味深くなり、世界の果てについての考察に入り、オウム真理教に言及されるに及んで頂点に達した。授業の最終回をこんなに名残惜しく感じ、ずっとこのテーマの中に身を置いていたいと思ったのは初めてのことである。レポートの課題が与えられ、まず考えたことは、推薦図書を読むのも意義があることであろうが、50 年生きてきた今の私が、これまでの自分と宗教との関係を一度しっかりと見つめ直して総括し、世界の果てについて自分なりに考察することによって、これからの方向が見えてくるのではないかということであった。それに加えて、鶴岡先生から、何か助言が頂けたら、こんなに有意義なことはないだろうとも、実は期待している。尤も、宗教学を専攻するかどうかは未定である。西洋古典学か歴史学を専攻し、宗教に関してはそれでも一生考えていくことになるのかな、考えざるをえないのかな、この私は、という気がしている。

私は無神論者である。無神論者であるということにしている。寺や神社、墓の前では手を合わせない。それでも、私は唯物論者ではない。人間を始めとす

る生物が原子の集まりに過ぎないとは思えない。いつか、科学の力で生命を生み出せる、とは全く考えられない。とはいえ、肉体と精神が別物か、魂は不滅か、ということになると、肉体があってこそその魂、肉体がなくなると同時に魂という意識といったものは多分なくなるのだろう、と考える者である。それでは、唯物論ではないのか、と問われると、そうではない、と答えるしかない。正直なところよくわからない、よくわからないことには関わらない方が平穩に暮らすにはいいだろう、と決めての無神論であり、無神論者であるからには手は合わすわけにはいかない、ということなのである。授業で先生が言われた。科学万能主義が蔓延って、何でも物質や科学の力で解明出来るという風潮が広まり、精神や宗教、世界の果て、といったことを語ると胡散臭いといった顔をされる。でも待って、本当にそれでいいの、と。私も同感である。無神論者であるにもかかわらず。

4年前の2008年5月末、正午近く、私はランス大聖堂の中にいた。ステンドグラスの美しさに目を奪われた後、祭壇の辺りをゆっくり見ていると、急に多くの人祭壇の近くに集まってきた。ミサが始まるのだ。今更、出るに出られず、カトリックの信者の振りをしてミサに参列した。ミサが進むにつれて、厳かな中に温かさの混ざった空気が広がっていく。ミサが終わると信者たちは互いに抱擁を交わした。私も前にいた女性と抱き合った。彼女は確かカナダから来たと言った。私は日本から来たと言って微笑み合って・・・そこにいる信者の一人一人が同じ思いでいる、と感じられた。一つにつながっているという連帯感が満ち溢れ、その時、私は間違いなく幸福であった。涙がこぼれそうになった。宗教というものが感覚で分かった気がした。信者たちを羨ましく思った。カトリックの信者になろうかと一瞬思ったほどであるが、私はどの宗教の教義も信じられないのだ。無神論者でいるしかない。しかし、ランスでの体験以来、人は宗教なしで本当に幸せになれるものなのか、という問いが、ふとした折に心に浮かんでくる。

日本では、人々は初詣に出かけ、お盆で墓参りをする。外から見たら立派な宗教国家だ、と先生が言われた。でも、おそらく多くの日本人は神道の信者であるとか仏教徒であるからというわけでなく、何となく習慣だからと、深く考えずに行っているだろう。そしておそらく、彼らはオウム真理教のような新興宗教にははまらないのであろう。私は初詣に行かないし、墓参りもしない、無神論者であるから。しかし、オウム真理教にはまる危険性は大きいにあるのだ。

前置きが長くなった。それでは、本論に進みたい。本論では、まず、私の体験した二つの神秘体験について語る。私の無神論がいかに脆弱なものであるか明らかになってしまいうし、特に二つ目の体験は振り返るのが辛いのだが、決心したのだ、仕方がない。覚悟して取り掛かりたい。その後、オウム真理教につ

いて触れ、最後に世界の果てについての考察を行う。4000字は軽く超えるだろう。許して頂きたい。

## 本論

### 1. 神秘体験その一

今から40年近く前、私が小学5年から6年に上がる春休みだったと思う。近所のおじさんと、その家の小学生の姉妹、じゅんこちゃんとかえちゃん、妹、そして私の5人で近くの山に登ることになった。途中でちえちゃんが疲れたと言い出したので、頂上に着いていなかったが山を下りることになった。私は、折角だから上まで行くと言ってきかず、みんなは私を残して下りてしまった。どれくらい歩いたか、やがて頂上に着き、腰を下ろして休んだ。さわやかな風が吹いていい気持である。眼下に姫路城が見える。お堀端を散歩する人、天守閣のそばで遊ぶ人たち。素晴らしい眺めを堪能した後、腰を上げ、山を下りた。週末だったか、姫路の街のデパートに行くことになった。姫路城が近くなると、バスの窓から外を見て、この前の山を探した。しかし、不思議なことに、お城の近くには、お城を眼下に見下ろせる山は聳えていない。狐につままれたような気分だった。登った山は家の近くに確かに存在する。でも、どう考えてもその山の頂上からあんな風にお城は見えないし、人々があんなにはっきり見下ろせる筈はない。納得がいかなかった。もう一度山に登れば謎が解けるかもしれないが、どういうわけかそうしようという気は起らなかった。今後もその山に登ることは無いだろう。この不思議な体験のことは妹にも話さなかった。なぜだか分からない。アポロ11号が月面に着陸したのが小学2年、大阪万博が小学3年、科学万能の時代の到来を高度経済成長の中で実感していた私は、理屈に合わないことは大嫌い、感情のようなややこしいものは意志の力、理性の力でコントロール出来ればいいのに、と思うような子供であった。そんな私にとって、この体験は長い間、私に起きた唯一の不思議な出来事であった。

### 2. 神秘体験その二

今から16年前、1996年の夏、ある人と出会った。次男は幼稚園で仲良しの友達が出来、彼女はその母親であった。親しくなると彼女は不思議なことを言い始めた。自分はゾクチェンの修行者であるとか、チャクラを開発するとか、オウム真理教の中では井上嘉浩が最も魂のレベルが上だとか、自分たち（彼女と著者）はソウルフレンドであるとか、修行したらセックスなんかよりずっと素晴らしい境地に至るとか、私（著者のこと）は結構魂が上の方にあるから見込みがあるとか、自分が側にいれば東大受験に失敗することは無かったのにと

か、黙っていても息子の考えていることが読めるのだとか、いつでも幽体離脱で空が飛べるとか、阪神淡路大震災を予言したとか・・・そして、スプーンを曲げて見せた。好きなようにゾロ目が出せるから自分はバックギャモンの女王と呼ばれている、と言いながら私と一緒にゲームをして、次から次にゾロ目を出して見せた。彼女の家のリビングで、窓から差し込む西日が当たって彼女の顔が光輝いて見えた。夏が過ぎ、秋になり、冬が近づき、ある寒い朝、私は訳もなく気が弱くなり、漠然とした不安でいっぱいになって身も心も震えていた。実際身体は冷え切っていた。そこに彼女が現れた。私の様子を見ると、温めてあげる、と言いながら私の片手を片手で取った。されるがままになっていると、そのうち、彼女の手から熱が伝わってきて、手から全身に熱が行き渡り、冷え切っていた全身がポカポカ温かくなってきた。その熱は一日保たれ、気温が低いにもかかわらず、私は一日中身も心も温かだった。この人の側にいたら、いつでも温めてもらえるんだ。ずっとこの人の側にいようか。こうして私は、だんだん洗脳されていった。自分でもスプーンを曲げてみたくなった。熱によるものだとは気が付いていた。彼女はほとんど擦ったりしなかったが、私は擦らないと熱が起きないので、右手でスプーンの柄をしっかりと握り、親指で擦り始めた。そのうち熱くなってきてスプーンはぐにゃりと曲がった。同時に、私の親指には水膨れができた。火傷したのである。彼女のようになりたいたいと思った。そこへ彼女から電話が掛かってくる。「今、私のこと考えていたでしょう」そして、確かに私は彼女のことを考えていたのだった。

彼女という時間が長くなるにつれ、トラブルも多くなった。私は、その頃もう一人子供が欲しかった。彼女に話すと、「止めた方がいい、不幸になるよ」と言われた。彼女から離れた方がいいかな、と思い始め、数か月止めてしまっていたことを再開したりしていると、彼女から電話が掛かる。「ずっと貴女の心が読めていたのに、最近読めなくなってきた」無性に寂しくなり、涙が出てきて、彼女のところに車を飛ばす。バックギャモンをした。たまたま前に彼女が座っていた場所に私が座った。私の顔に西日が当たり眩しかった。信じられないことにゾロ目の連発で、自分が自分でないというか、自信に満ち溢れ、神にでもなったような気がした。「貴女が別人に見える」と彼女は小さく呟いた。神にでもなったような気分はその時だけのものであり、すぐにまたいつもの小心者に戻ってしまったのであるが。冬の間、彼女に振り回される毎日が続いた。ある日、思い切って彼女に告げた。「私、貴女の信者になるつもりはないよ」彼女の顔色がさっと変わった。彼女が何と答えたか思い出せない。「そう」とだけ言ったのか「別に信者になれなんて誰も言っていないよ」だったのか。それからも色々あったが、彼女から離れるべきだという思いが私の中にある以上、関係が良好なものになる筈もなかった。春になり、子供たちは、二年組になった。子

供を園に送って行ったあと、数人のお母さんたちと喋っていた。私は彼女のことをボロッと口に出してしまったのである。子供のお迎えの時だったか、彼女がつかつかと近づき私の腕をつかんで人のいないところに連れて行き、罵りの言葉を投げつけた。「安政さん、ちょっと、私のことをあることないことべらべら喋ったら、名誉棄損で訴えるよ！それから、もう子供にも話し掛けないで！」彼女とは口を利かなくなっていたが、彼女の子供には話し掛けていたのであった。久し振りに彼女から姓で呼ばれた。他にも人間失格と烙印を押すような言葉を色々浴びせられ、すっかり参ってしまった。

自分を立て直すのに大変な思いをした。不思議な力で彼女の方に引き寄せられるように感じ、電話の受話器を取ろうとする右手を左手で押さえつけたり、掛かる筈のない電話を、掛かってきてほしくないという気持ちと掛かってきてほしいという気持ちに引き裂かれながら睨み続けたり。オウム真理教の土谷正実が、オウムから、麻原から離れようとしても、どうしても強い不思議な力で教団に引き戻されてしまった、と語っていたが、きっとこんな苦しみを味わったのだろうなと思った。とにかく、彼女と彼女の子供に絶対に話し掛けないという決心を守り抜くことと、2か月先のフランス語検定2級に絶対に合格するという目標を定めることで、何とか乗り切った。おそらく向こうは私のことなど何とも思っていないんだろうに、私は彼女の声が聴きたい、という禁断症状でのたうちまわっている。馬鹿みたいと思ってもどうすることも出来なかった。怖いもの見たさで彼女の写真を見ると頭がくらくらし、胸が苦しくなった。仏検には何とか合格することが出来た。命懸けだったといってもいい。ほっとした。けれども、自分の力ではそれが限界だった。ある日、今すぐ何とかしないと自殺するかもしれないと思った私は初めて心療内科を訪れ、カウンセリングを受けるように言われた。予約して駐車場に戻ったところで再び病院に舞い戻り、何か薬をもらわないと、今すぐ自殺しそうな気がする、と言って、薬をもらって帰った。カウンセリングを一回受けたところで妊娠していることが分かった。夏の終わりだった。喜びもつかの間、子宮外妊娠で流産し、手術をすることになってしまった。彼女が不思議な力でお腹の子供を殺したのだと思った。彼女は子供をもう作るなど言っていたのだ。離れていても不思議な力で支配される。一生逃れられないのか。こんなことなら、信者にでも奴隷にでもなっておけばよかった。それでも今更戻れない。苦しい日々は長く続いた。

秋が過ぎ、冬が過ぎ、再び春が巡ってきて、子供たちが三年組に上がる時、彼女は家の近所の幼稚園に通わせるからと（直接聞いたわけではないが）、私の前から姿を消した。それ以来、彼女とは一度も会っていない。私は子宮外妊娠の手術で入院していたとは、ほとんど誰にも知らせていなかった。自殺未遂だろうと彼女が言っていた、ということ、後にあるお母さんから聞いた。

### 3. オウム真理教について

自分の神秘体験について長々と書いてきたが、書き進めながら、二つ目の神秘体験は、一つ目の神秘体験があったからこそ起きたものだという気がしてきた。小学生の時、どうしてあんな体験をしたのか分からないが、心穏やかでいるために無神論者であると宣言している私は実のところ不思議なことに惹かれる傾向がある。それが危険だと自覚しているが故に、自分を守る手段として無神論を利用しているに過ぎない、とも思う。それが証拠に、30年前に入学した早稲田大学では、一緒に3週間外国旅行をするほど親しかった友人がオウム真理教に入信してしまい、彼女から「真弓さんも一度麻原尊師の講演を聴きにきてくださいよ。きっと出家したくなると思う」と何度も誘われたのだ。幸いなことに、彼女は私よりより2学年下で、私が大学を卒業して姫路に戻ってから、彼女はオウムに入信し、出家したのだった。わざわざ姫路から麻原の講演を聴きに東京や大阪に出ていく気はなかったので誘いを断り続けた。もしも東京にいて誘われたのであれば、ほぼ確実に講演を聴きに行っていたと思う。そして・・・授業で鶴岡先生も言われたが、私もオウムの実態は一般に想像されているのとは随分違うと感じている。なぜなら、早稲田大学理工学部建築学科を優秀な成績で卒業した彼女が信じたから、では理由にならない。同じ合唱サークルに所属し、自分と感覚が似ていてとても親しかった後輩が信じたから、である。オウムの魅力は、一言でいうと、超能力者になれること。信者たちは、グルの麻原の側において色々と不思議な体験をしたのだと思う。何を使って超能力などというありえないことを理系の優秀な頭脳に信じ込ませることが出来たのだろう、と首をかしげる人々がいるが、二番目の神秘体験を経た私は、特別な薬や装置を使わなくても信じ込ませることは可能だ、と確信を持って言える。全ての人々を信じ込ませることが出来るとは言わない。ただ、ある人々には可能である。少なくとも彼らにとって、麻原は確かに超能力者であった。例えば、エネルギー、熱、気、といったものだったのかもしれない。よくは分からないが、そういうものを体から強く出すことが出来る人間がいる。感じる側にも、それらに強く反応する人間がいる。何が原因なのかははっきりとは分からないが、少なくとも、不思議なものに対する憧れが強ければ強いほど反応しやすいのだと思う。本人が自覚している、いないに関わらず。私は16年前に例の彼女から熱を受け取り、一日保ったが、誰もが同じようになるかどうかは分からない。16年前から15年前にかけてのことは、私が彼女に騙されたのだという人がいたが、彼女に私を騙して何か得になることがあっただろうか。一度、彼女に言われたことがあった。「これまで、何人ものご主人から怒鳴り込まれた。うちのを一体どうするつもりなんだって。別にどうするつもりもないのに。お願

いだから、ご主人に怒鳴り込ませないでね」このことは夫に話してあった。夫は怒鳴り込みはしなかったものの、かなり心配したであろうことは想像に難くない。錯覚であろうという人もいることだろう。それはそうかもしれない、と答えるしかない。ただ、全ては錯覚、気のせいであったかもしれないにせよ、彼女と関わって体験したことは私にとっては真実以外の何物でもない。あの苦しみが真実でなかったとしたらどんなに楽であったことか・・・彼女にせよ、麻原にせよ、折角不思議な能力を備えているのなら、どうしてもっといい使い方をしないのか。関わる人を決定的に苦しめているだけではないか。不思議な力を自分でも持て余しているのか。大学時代の友人はオウム真理教に入って、麻原と一緒に選挙にも出た。自分が当選しなかったのはともかく、グルが当選しなかったのは、裏で工作されたか、何か陰謀があったに違いないと言っていた。坂本弁護士殺害に関してオウムが疑われ始めた時、それはあり得ないと言って、わざわざ姫路の私に電話を掛けてきた。全く疑っていない様子だった。「もしかして、グルが死ぬと言ったら喜んで死ぬんじゃないの」と尋ねたら、「真弓さん、よく分かるんだね」と言って笑った。言葉を失った。学生時代、生きているってことは不思議だ、素晴らしい。核シェルターでも何でも作って生き残れるのであれば、最後の一人になってでも生き残りたい、と言っていたのに・・・それ以来彼女との音信は途絶えている。暫くして地下鉄サリン事件が起こり、坂本弁護士殺害もやはりオウムの仕業だったと明るみに出た。オウムの幹部たちは大勢逮捕されたが、グルの子供たちの世話をかなり任されていると言って張り切っていた彼女をテレビで見かけることはなかった。それ以後、彼女がどうなったか、知る者はいない。生きているのか、死んでしまったのかも全く分からない。今でもふと彼女のことが懐かしくなり、大学時代の彼女にもう一度会って、語り合ってみたい気がする。地下鉄サリン事件が起こった翌年、私は二番目の体験をすることになるのだった。小学生の時に不思議な世界を垣間見るような体験をし、身近なところで、間接的にはあるがオウムに触れていたことがかなり影響したことは間違いない。これらのことは、勿論彼女に話したものである。

#### 4. 世界の果てについての考察

昨夜、嬉しいことがあった。オウム真理教に入信した友人のことをレポートに書いていると、彼女に出会った頃のこと、一緒にしたことや話したことが蘇ってきて、とても懐かしくなり、もう一度会いたい、と言う思いでいっぱいになってベッドに入った。すると、すぐ側に大学時代の彼女がいて、私に語りかけてくるように感じたのである。私自身は当時の私であったのか、今の私であったのか・・・と書いて、面白いことに気付く。昨夜のようなことがあると、

相手の魂が自分に会いに来た、と感じる人も多いのではないか。こちらの魂が相手の魂を呼び寄せたと考えることも出来よう。しかし私はそんな風には考えない。こちらの思いが強いほど相手に関する記憶が鮮明に蘇るのだと思っている。昨夜は、彼女の声もそのまま蘇り、私に語りかけてきた。記憶の再現だったわけだが、やろうと思えば、彼女に語らせたいことを彼女の声で語らせることも出来た筈だし、私もそれに答え、彼女がそれに答え、と言う風に会話も楽しめた筈である。勿論声に出してではなく、会話の内容も私が作り出すものである。全てこちらの思いに基づく一方的なものだ。死者の霊を呼び出す、といったこと、イタコ、シャーマンといったものも、基本的にはこういうことだと考えている。神憑り、霊の乗り移り、語る者が全く知らない筈のことを憑依した何者かが語る、といったことはどう説明するのかと尋ねられると、私には答えられない。彼ら、彼女らが騙している、何かからくりがある筈だ、とも思わない。この場合の真実の定義は難しいので、私に言えることは、「ある意味でそれらは真実なのだろう」ということだけである。このことには、これ以上立ち入らない。

私は無神論者であると言った。墓はいらない。先祖の墓参りもしない。ご先祖様があってのあなたなのに、と母親から咎められる。先祖がいての私、これは当たり前のことである。だからといって感謝したり墓に手を合わせたりという気は全く起きない。私は偶然こうやって生まれ存在している。だから、死ぬまで存在し続けるだけである。虚無感に囚われているわけではない。数年前に、墓の前で悲しまないで、自分は墓の中にはいないから、という内容の歌が流行った。あの歌にはとても共感できる。作者の伝えたいことを正確に理解しているかどうかは定かではないが、自分なりに解釈して、いい歌だと思った。墓の中には骨が入っているだけである。骨に手を合わせて一体どうするのだ。小さい頃から非常な違和感を覚えていた。墓参りが嫌でたまらなかった。自分の意思で行動できる年齢になるとすぐに墓参りは中止した。小さい頃、父方の祖母、母方の祖父母が生きていた。私が大学生になる頃にはみんな亡くなってしまったが、彼らは私の記憶の中で生きている。墓の中にはいるのではない。そもそも、お盆の時だけ、彼岸の時だけ墓参りをし、墓に手を合わせている時だけ彼らを思い出すというのも変な話だ。私はおかしなことを言っているのであろうか。私には墓参りをする人々が本当に理解できないのである。そして、墓参りを進んで行く人々からは私は全く理解されず、「どうして骨に手を合わせるの」と質問でもしようものなら白い目で見られるだけである。だから、私は黙っているしかない。しかし、罰当たりと非難されるいわれはない。祖母たちはいつでも私の中に生きており、いつでも思い出すこと、心の中で甦らせることが出来る。両親が死に、私たち姉妹弟や、伯父伯母たち、いとこ達が死に、彼らを覚えて



いる人々が一人もいなくなったら、彼らは本当に死んだと言えるだろう。それでいいではないか。私が死んだら葬式も墓もいらない、と言ってある。私が死んでも、私は子供たち、友人たち、知り合いたちの心の中で、生き続ける。私を知る者が一人もいなくなった時、私は本当に死ぬ。それでいい。私を直接知らない人々からも永遠に覚えておいてほしいなどと思わない。私の骨に向かって手を合わせてほしいなどと全く思わない。想像するだけでも馬鹿らしい。

長くなったが、ここまで書いてきたことが私の宗教観の根底にある。どの宗教の教義も信じない。エホバ、アッラーのような人格神、唯一神は信じない。ただし、生きていることは不思議である。意識がどうやって生まれるのか謎である。生命を人工的に作り出すことは永遠に不可能であると思う。刻々と変化するこの身体、自分が自分であるというこの意識、泣いたり笑ったりといった感情、様々な人や物によって引き起こされる感動。こういったものをいったいどうやって作り出せるというのか。私は唯物論者ではない。人間を始めとする生物が原子の集まりに過ぎないとは思えない。そう思うには、余りに不思議である。生きていること、存在していることのも不思議さの前では、全てのことが不思議とも思えなくなってくるほどだ。この不思議さを神と名付けるなら、それには納得出来る。でも敢えて「神」と呼ばなくても、「不思議」でいいではないかと思う。唯物論者でないと言った。それでは肉体と精神とを完全に分けて考えているかというところでもない。肉体があつてこそその精神だと思っている。魂が身体から抜け出すとは思わない。だから、三途の川だとか、天国、地獄、といったことは信じないし、輪廻転生だとかも信じない。確信があるわけではない。でも、生きていることが余りに不思議なので、わざわざ死後にまで別の不思議を用意する必要性を感じない。輪廻転生はあっても構わないが、私に前世があったとして、今の私はそのことを全く感じられないのだから、どちらでも同じことである。私に後世があるとして、後世の私は今の私を全く感じられないだろうから、後世の私にとっても、今の私にとってもどうでもいいことである。

死は永遠の眠りであると思ってきた。苦しい時、いつでも死ぬると考えることで何とか乗り越えてこられた気がする。眠る時、このまま目が覚めなかったらいいのにと考えたことは何度もある。私はよく眠れる方であり、眠りは常に安らぎであった。余り眠れないという人がいるが、さぞかし辛いことだろう。永遠の眠りである死は別に怖くない。死ぬのが怖いから何とか救われたい、というのは理解しにくい。結局人は誰でも死ぬのが怖いのだ、とか、全ての不安の根底には死に対する恐怖がある、と言われると、納得できないものを感じる。生きていることに驚嘆しつつ毎日を過ごしており、死ぬことを恐れず、となると、これ以上何を望むのか、全く幸せそのものではないか、と嫌みの一つも聞

こえてきそうである。確かに、特に何かを望んでいるわけではない。ただ、神経質な方なので、苦しいことも多く、幸せそのものと言うわけではない。どうしてこんなに苦しいのか、理屈の上では苦しく感じる筈がないのに、と、時々思う。周囲の物事に、過剰に反応してしまうのである。この性格によって苦しくなることが多く、何かにしがみつきたい、救われたい、とってしまう。どうしたらいいのだろう。

関係のないことを書いているかもしれない。本筋に戻ろう。「人生は舞台である」と、ギリシャの昔から言われてきた。「君は来た。君は見た。君は立ち去った」私はどこから来て、どこへ行くのか。世界の果てとは、人生と言う舞台の舞台裏のことであるかもしれない。私にとって世界の果て、というのは、万人に共通のものではなく、個人的なものである。それは当たり前ではないか、万人に共通な世界観を打ち立てるなんて大それた望みは持たないものだ、と言われそうだが、そういうことではない。万人に共通の世界の果てと言うと、地球の始まりと地球の滅亡だとか、死後に魂が集まる天国や煉獄や地獄だとか、輪廻転生のための魂が待機している場所だとか、オリンポスの神々が住まう場所だとか、ハデスの神が住む冥界だとか、日本神話の八百万の神々が住まう場所だとかを連想し、それに対比するものとして、我々が生きるこの世界を考えるのが普通だろう。しかし、私にはこの線で考えることは困難である。私にとって、世界の果てと言うときの「世界」とは、自分が生きているこの世界のことであり、自分が死んだら意味を失うこの世界のことである。私は今この世界に生きている。不思議なことである。死んだ人、去った人を時折思い出したりしながら、この不思議に満ちた世界で偶然出会った人や事物を大切にし、一生懸命生きている。苦しいことは多い。でも嬉しいことや感動することも多い。神秘体験もこの世界に属すると考えている。生きていることがそもそも神秘的なものであるから。私が死んだら、この世界は終わる。神秘はおしまい。そして私は永遠の眠りに就く。私にとって、世界の果てとは、私が生きて存在するこの世界が始まった時、すなわち私が生まれた時のことであり、この世界が終わる時、すなわち私が死ぬ時のことである。

## 結論

勢いで書き進めてきた。これが今の私に考えられることの全てである。今後、どのように変化するか自分でも分からない。ただ、文章にするのは初めてであるが、私はずっとこのような世界観を持って生きてきたように思う。宗教も、頭から否定してかかっているわけではなく、信じられるものに出会ったら、それはそれでいいと思っている。むしろ幸運であるかもしれない。無神論者であるといいながら、自分では実はかなり宗教的だと思っている。宗教的であると

は、そもそも、不思議なことに感動することではないだろうか。

このレポートを読まれた先生からどのように思われているだろうと想像するとちょっと怖い。でも、ミスを訂正したらそのまま提出するつもりである。宗教学の授業を取ったお陰で、毎週、貴重な一時間半を過ごすことが出来、試験ではなくレポートだったお陰で自分を見つめなおすことが出来た。とても感謝している。冬学期はどんな素晴らしい授業に出会えるだろうか。今から楽しみである。そして私はギリシャ語とラテン語に打ち込みつつ、人は宗教なしで本当に幸せになれるのかを考え続けていくのだろう。